

台灣情報誌

# 交流

2014年2月 *vol.875*

公益財団法人 交流協会  
Interchange Association, Japan



# 交流

2014年2月  
vol. 875

## 目次

CONTENTS

台北の歴史を歩く その23 文山区と新店の歴史スポットを訪ねる(前編) …………… 1 (片倉佳史)	
【台湾内政、日台関係をめぐる動向】 統一地方選に向けた動き、日台間で5項目の実務協力取り決めが 署名(前編) …………… 6 (石原忠浩)	
民間学生交流～日本台湾学生会議 in AKITA～ ……………10	
台湾応援ゆるキャラ「タイワンダー☆」だぁー ……………16	

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

### ●● 交流協会について ●●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

## 文山区と新店の歴史スポットを訪ねる（前編）

片倉 佳史

台北の歴史をたどる旅。今や人口260万を数える大都市に発展している台北市だが、その歴史は随所で日本と関わりをもち、結ばれている。今回は台北市南部の文山区と新北市新店区に残る日本統治時代の遺構をたどってみたい。

### 南と東に伸びていった台北市

台北市は日本統治時代を迎える以前、つまり、清国統治時代は萬華（まんか）と大稻埕（だいとうてい）の両エリアが中枢となっていた。これは淡水河の水運による場所が多く、当初は萬華が交易の場として発達したが、土砂の堆積によって港灣機能が低下し、繁栄が大稻埕に移る。19世紀後半には台北城が築城され、1895年に台湾が日本に割譲された後も、ここが行政の中心として機能していく。

日本統治時代の台北は順調な発展を遂げ、巨大化していった。当初、内地人と呼ばれた日本本土出身者とその子孫が住んでいたのは旧台北城内だったが、のちに西門町が開けるようになり、大正時代には鉄道線路の北側の大正町（現林森北路周辺）にも内地人街が形成される。このほか、旧台湾総督府専売局のあった児玉町界隈（現南昌路周辺）にも内地人は多く住んでいた。

肥大化する台北は最初は南に、そして、東に市街地をのばしていった。南には台北帝国大学（現国立台湾大学）や水源地（現自来水博物館）が設けられ、富田町や水道町、昭和町などがあった。東は縦貫道路（現八徳路）が軸となって発達したが、1932（昭和7）年の都市計画ではすでに現在の忠孝東路や仁愛路・信義路などの整備が予定されている。これは戦争によって実現しなかったが、戦後、設計

図は中華民国政府に受け継がれ、整備されることになった。

今回は台北市南部、現在は文山区と呼ばれているエリアと新北市新店区に残る日本統治時代の遺構を紹介してみたい。他のエリアに比べると、日本とのかかわりは薄いようにも見える両地区だが、よくよく訪ね歩いてみると、そこかしこに日本の面影を感じ取ることができる。週末の散策にこういった遺構を訪ね、歴史に思いを巡らせるのも面白いかもしれない。



昭和7年に立てられた都市計画地図。日本統治時代には完成しなかったが、忠孝東路や南京東路、仁愛路、信義路、建国南北路などはすでに整備が計画されていた。

## 公民館となった校長官舎を訪ねる

文山公民会館。現在はそう呼ばれているこの建物は日本統治時代の校長官舎である。正式には台北州深坑庄木柵国民学校長官舎。現在は公民館として使用されている。

木柵（もくさく）は現在でこそ台北市に組み込まれているが、日本統治時代は台北州文山郡深坑庄に属していた。木柵に設けられた教育機関は1906（明治39）年に設立された景尾公学校内湖分校を起源とし、1912年に木柵公学校となった。1941年には学制の改正によって、公学校は国民学校と改称されている。そして、戦後に木柵国民小学となって現在に至る。

この建物が竣工したのは1927（昭和2）年のことだった。日本統治時代の官舎によく見られたスタイルで、屋根には日本式の黒瓦を擁している。玄関は中央に位置しているが、間取りは左右非対称となっているのが興味深い。敷地面積は636平方メートルという記録が残っている。

私は日本統治時代にこの官舎を訪れたことがあるという若狭靖子さん（岡山市在住）に往時の話をうかがう機会を得た。当時、屋内は板敷きの応接間のほか、畳部屋があり、前庭にはザボンやバナナなどが植えられていたという。

戦後も長らく校長の官舎として使用されていたというが、数年前からは空き家となっていた。遺棄されていた時間が長かったこともあり、建物の傷みは大きかった。それでも取り壊しには反対の声が大きく、大がかりな修復工事の上、ここを公共空間とする計画が立てられた。その工事が終わったのは2002年だったが、安全面の確保から、建物の基礎部分から一新する必要があったという。

建物正面の壁面は改められており、正直なところ、木造家屋の趣は感じられない。しかし、屋根や回廊などは原貌に忠実で、復元に際しての心遣いが感じられる。台湾ではこういった歴史空間が再利用されるケースが多く見られるが、ここは文山區で唯一残っている日本統治時代の家屋であり、その価値が評価されている。台湾の人々が歴



公民館として生まれ変わった木造官舎。公共スペースとして整備されている。向かいには文山區行政中心（区役所）がある。



緑地には1897（明治30）年に建てられた忠魂碑が移設保存されている。残念ながら、現在は文字を読みとることができない。

史を伝える建造物が大切に扱う姿をここでも目にすることができる。

## 石燈籠が並ぶ指南宮旧参道

文山區には指南宮と呼ばれる名刹がある。ここは台湾北部における道教の聖地で、台湾でも指折りの規模を誇る寺廟である。俗称は仙公廟。海拔223メートルの地点にあり、猴山岳と呼ばれる山峰の中腹に位置している。

ここからの見晴らしは素晴らしく、また、一帯が文山包種茶の産地になっていることもあって、谷向かいの猫空地区には台湾茶を楽しむ茶芸館や喫茶店、カフェが並んでいる。2007年夏には台北市が運営するロープウェーも開業し、アクセスが格段便利になった。地元の若者たちはもちろん、外国人旅行者の姿を見かけることも少なくない。

この廟が開かれたのは台湾が清国の統治下に





指南宮は庶民信仰の場として終日参拝客が絶えない。現在はバスのみならず、ロープウェーを利用して訪れることもできる。

あった1891年に遡る。これまでに何度かの改築工事が行なわれ、現在の正殿は戦後になってから建てられたものである。一見したかぎりでは戦前の建造物は見られないように思えてしまうが、旧参道に日本統治時代の遺構が残っていた。

### 石段がひたすら続く旧参道

現在、指南宮へ向かう際に通る道路は、戦後に設けられたものである。これを利用すれば、バスや自家用車で門前街の入口まで行くことができる。この道路が開通する以前は、誰もが1200段という長い石段を上がらなければならなかった。今となっては旧参道を利用する参拝客は皆無に等しく、見かけるのはハイキングを楽しむ人々と健康維持のために身体を鍛える老人だけである。

私が指南宮を訪れる際も決まってバスを利用してしたが、ある日、車窓に古めかしい石燈籠が見えた。ほんの一瞬のことだったが、それが「日本式」であることは判別できた。灰色にくすんだその姿は時の経過を強く感じさせていた。

バスを降り、その方向に歩いていくと、民家の脇で、石燈籠が生い茂った樹木に埋もれるように立っていた。

ここは指南宮旧参道の入口だった。表通りからは少し離れている。両脇には民家が迫るように並んでおり、その間に石段が伸びている。その先にもいくつかの石燈籠が見える。改めて近付いてみると、奉納者の氏名が刻まれていた。いずれも台湾人の姓名だった。

刻まれた文字は無傷で残っていた。しかし、建立日時が刻まれた部分だけは例外で、たとえば、「昭和」とあった場所は判読できないように削り取られていた。これは言うまでもなく、戦後の行政指導でなされた行為である。

指南宮は庶民信仰の場であり、人々の生活に密着した存在である。当然、地元住民が抱く思い入れは強い。日本統治時代初期、台湾総督府は神社創建を全島で推進しながらも、ある程度は土着の信仰や習慣を尊重していたふしがある。しかし、昭和時代に入って皇民化運動（台湾人を日本人に同化させる政策）が盛んになると、伝統的な寺廟を廃止させ、神社の参拝に一本化するという動きが顕著となっていた。

こういった寺廟の排斥は、特に台南州や新竹州で行なわれたが、その前段階として、廟に寄進される石燈籠を日本式に改めるということが行なわれた。こういった例は台北の龍山寺や鹿港の天后宮などでも実施されている。現在も日本式の石燈籠が廟の境内に残るケースは各地で見られる。

しかし、こういった日本式の石燈籠は積極的に管理されているわけではない。長年にわたって風雨に晒されたため、風化しているものが多い。また、暴風雨や土砂崩れによって倒壊したものも少なくない。旧参道の存在と同様、人々から忘れられ、朽ち果てていった。早朝や夜間に参拝客の足下を照らしていた石燈籠も、静かに苔むしていく運命にあるようだ。



旧参道の入口は路地の奥にある。指南宮を参拝する信者は多いが、現在はバス道路が完成しており、旧参道を歩く参拝者は少ない。日本統治時代は「指南山参拝道路」と呼ばれていた。



石灯籠はほぼ原型をとどめている。寄進者はいずれも台湾人である。文山郡は日本統治時代の行政区分で、現在の台湾に「郡」というものは存在しない。参拝道路の先には紀元二六〇〇年を記念した彫像も残っている。



旧参道の入口はわかりにくい場所にあるが、往時の面影は残っている。石灯籠はほぼ原型をとどめている。

## 新店の神社跡地と遺構を訪ねる

厳密には台北市内ではないが、南郊に残る日本統治時代の遺構を紹介してみたい。

新北市新店区にある神社の遺跡である。新店には文山神社が設けられていた。これは、文山郡を鎮護する社とされていた。祭神には明治天皇以下、大国魂命、大己貴命、少彦名命、そして北白

川宮能久親王を祀っていた。

この神社の鎮座式が挙行されたのは1939（昭和14）年4月7日。台湾人のアイデンティティを日本人化しようと試みた「皇民化運動」に連動して設けられた。これらの神社は日本統治時代初期に創建された神社に比べると規模が大きく、市街地からはやや離れてはいるが、しっかりと神苑を確保した上で建造されている。

日本統治時代、新店は台北州文山郡に属し、新店庄を名乗っていた。昭和17年度末の統計では文山郡の人口は6万7075名となっているが、そのうち、2万4174名が新店庄民であった。なお、文山郡は新店庄のほか、深坑（しんこう）庄、石碇（せきてい）庄、坪林（へいりん）庄の各庄を管轄していた。

神社の跡地は中華民国空軍の軍人墓地となっている。かつての神苑は整地されており、神社らしい雰囲気は感じられない。鳥居があったと思われる場所にも中華風の装飾を施した牌楼（ゲート）が設けられている。

日本統治時代に撮影された古写真を見ると、この神社には数多くの石灯籠が並んでいたようである。しかし、これらは痕跡を残しておらず、往時を偲ぶことはできない。わずかに石灯籠の土台と思われる石塊が確認できるばかりである。本殿や拝殿、手水舎なども姿を留めてはいない。

しかし、軍人墓地にいたる手前の太平宮という廟に立ち寄ってみると、ここには神社のものと思われる狛犬が置かれていた。雌雄一対あり、大きなものである。狛犬はその源流を考えると、中国大陆の文化との接点は深いものがある。そのためか、戦後の台湾に君臨し、日本統治時代の遺構を排除しようとした国民党政府や外省人官僚たちも撤去することは少なかった。ここもそういった流れの上にあると考えていいだろう。

さらに、やや意外とも思える場所にも神社の遺構が存在していた。

MRT 新店駅の近くにある瑠公新店紀念大樓というビルの敷地内に神社の手水鉢が置かれていた。正面には「奉獻」の文字が大きく刻まれ、下

には奉納者と思われる「瑠公水利組合」の名がある。これは新店溪から取水し、台北への供水を図った用水路のことで、古くは「瑠公圳」と呼ばれていた。水路は日本統治時代に拡張され、現在は台北市公館から新生南路～新生北路の下を流れて基隆河に至っている。

なお、側面には「昭和十四年二月建之」の文字もはっきり読み取れる。これらがここに置かれた時期などは不明だが、その経緯は興味の尽きないところである。

次回は台北東部の信義区に残る日本統治時代の遺構を紹介してみたい。

(前編終わり、次号に続く)



文山神社の狛犬。空軍墓地の建設が決まり、神社の施設が取り壊された際、運び込まれたものだという。



文山神社の敷地は空軍烈士公墓という墓地になっている。鳥居のあった場所は牌楼があるが、それ以外は神社らしい雰囲気は感じられない。



手水鉢は MRT 新店駅に近いビルの敷地に置かれていた。駅からは川沿いの遊歩道を歩いていくと見える。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾 鉄道の旅』(JTB キャンプックス)、『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』(玉山社)などの著作がある。台北の生活情報誌『悠遊台湾・2014』を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>



台湾内政、日台関係をめぐる動向（2013年11月上旬-2014年2月上旬）

## 統一地方選に向けた動き、 日台間で5項目の実務協力取り決めが署名（前編）

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）  
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

統一地方選挙まで1年を切り、国民党、民進党双方で候補者選びが進んだ。選挙まで1年の段階の各世論調査では、国民党苦戦必至の情勢となっている。馬総統は元日の祝辞で、全国民に経済振興を訴えた。日台間で5項目の実務協力取り決め文書が署名された。日台間で尖閣諸島周辺海域での漁業操業ルールに関する会合が開催され、一部合意された。

### 1. 統一地方選挙に向けた動き

#### （1）次期統一地方選挙の投開票日が確定

公職選挙事務の主管機関である中央選挙委員会 は1月21日に会議を開催し、直轄市6市を含む県市長及び県市議員選挙を11月29日に行なうと発表した。

#### （2）国民党の動向

馬総統の施政満足度が低迷し、苦戦が予測される国民党は12月から候補者公認作業に着手した。12月4日に同党中央常務委員会は、国民党が現職を務める新竹市、台東県、金門県のほか、奪回を目指す雲林県の候補を公認した。

同党は1月22日に第二回目の公認作業を行い、高雄市長に召集（徴召）の形で現政務委員で元高雄県長の楊秋興氏を選出したほか、基隆市、南投県の候補には、党内予備選を経て市議会議長、立法委員が選出された。

#### （3）民進党の動向

11月20日、民進党は第15期第7次中央執行委

員会を開催し、第一次県市長公認候補リストを採択した。現職県市長の高雄市、台南市、嘉義県、宜蘭県のほか、雲林県、屏東県、南投県の候補は電話による世論調査を通じて決定された。同日蘇貞昌主席は記者会見で「6直轄市で3市（現有2市）、他県市は過半数の8県市（現有6県市）での勝利を目標とし、同時に投開票される県市議員、郷鎮長などは議席増を狙う」と強調した。

同党は1月15日、第15期第8次中央執行委員会を開催し、第二次県市長候補を公表した。今委員会では彰化県、新北市、台中市長候補のほか、複数の県市議員の公認候補を決定した。今回公認された3市は、現在いずれも国民党籍の首長であるが、蘇主席は記者会見で「非常に重要な選挙区である」と強調し、勝利への強い意志を示した。

### 2. 『聯合報』等による直轄市長選挙に関する世論調査

次期統一地方選挙まで1年を切った12月下旬に『聯合報』は、2014年12月に直轄市に昇格予定の桃園市を含む直轄6都市の市長選挙にかかる世論調査を行った。2月上旬現在、国民党、民進党ともに一部の選挙区で正式な公認候補は選出されておらず、多少の変化はありうるが現段階の両党の情勢を知ることができるので紹介する。

国民党は、新北、桃園でかなり優勢、民進党は台南、高雄でかなり優勢、台北は拮抗、台中は民進党がやや優勢となっている。



### (1) 台北市長選挙

李登輝（当時は公選）、陳水扁、馬英九と民選選出の歴代総統が務めた台北市長は、総統の座を狙う者にとって極めて重要なポストであり、台湾世論において最も注目される選挙である。その一方で、日本の首都である東京都知事選挙が無党派層の行方が選挙を左右するのと比べると、「外省籍、軍人、公務員、教員人口の比率が高い」台北市は藍軍が緑軍を圧倒する「分かりやすい」選挙区である。1994年の選挙では藍軍陣営の分裂が陳水扁に漁夫の利をもたらし、4割弱の得票率で当選したが、しかし再選を目指した1998年の選挙では「陳市長」の施政満足度は高かったものの、国民党候補の馬英九に敗れた。またその後3度の台北市長選挙では、国民党候補がいずれも圧勝している。したがって、有権者の構造上、国民党は分裂しない限り優勢な選挙区である。

1月下旬の段階で国民、民進両党ともに、正式な候補を選出してないものの、国民党は連戦元副総統子息の連勝文中央委員のほか、現職立法委員、台北市議が出馬を表明している。連氏は、1月4日のマスコミ関係者との懇談で、2010年の選挙活動における銃撃事件で重傷を負った過去を回顧するとともに、「3年間に300件以上の脅迫を受けており、出馬に際しては自身と家族の安全が最大の考慮となる」と語りながらも出馬を否定しなかったことから、台湾メディアは「近々出馬宣言か」と報じた。緑陣営では、民進党員では呂秀蓮元副総統、弁護士の顧立雄氏のほか、非党員で台

湾大学病院医師の柯文哲氏が出馬表明をしている。

『聯合報』が、12月23日に公表した結果は、藍軍陣営の有力者の中では連勝文が36.9%の支持率を獲得し、現職立法委員の丁守中16.5%、蔡正元6.0%を大きくリードした。一方、緑軍陣営は非党員で政治的経験の無い柯医師が47.5%を獲得し、呂元副総統15.3%、顧弁護士11.3%を圧倒した結果となった。

これらの結果を踏まえて、同紙が両陣営の有力候補の対決を仮定し、連勝文と柯文哲が対決した場合の調査は、連が柯を僅か3%リードしたが、連と呂、顧候補との調査では連が30%以上リードする結果となった。（表1）

他機関の世論調査では、柯が連をリードしているものもあり、連柯両氏の支持率は、拮抗状態にある。柯氏は、無所属候補として出馬することで反馬英九、反国民党勢力を統合し、民進党の実質的な支持を受けることで選挙を有利に進めることを望んでいるが、民進党内には非党員の柯氏を党内候補選出のプロセスに組み込むべきか否かについて意見がまとまっておらず、蘇主席も世論の動向を参考にしつつも難しい選択を迫られており、党内調整が混乱する恐れも指摘されている。

### (2) 新北市長選挙

12月24日に公表された結果は、現職の朱立倫市長が游錫堃元行政院長を30%以上もリードするものとなった。その一方で、朱市長は党内にお

表1 2014台北市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率		候補者と支持率	
連勝文（国）	41	連勝文（国）	56	連勝文（国）	57
柯文哲（無）	38	呂秀蓮（民）	20	顧立雄（民）	19
いずれも支持せず	7	いずれも支持せず	12	いずれも支持せず	11
未決定	14	未決定	11	未決定	12

資料元：「2014台北市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月23日）頁1

表2 2014 新北市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
朱立倫 (国)	58	侯友宜 (国)	44
游錫堃 (民)	19	游錫堃 (民)	29
いずれも支持せず	7	いずれも支持せず	9
未決定	16	未決定	18

資料元：「2014 新北市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月24日）頁1

いてもポスト馬總統の有力候補であり、2016年の總統選挙への出馬を模索しているため、次期新北市長選挙に出馬しない可能性も指摘されており、朱市長は自身の後継者として元警政署長（警察庁長官に相当）で2010年から副市長を務める侯友宜氏に禅譲する可能性が指摘されている。同紙は右事情をふまえ、侯副市長 VS 游元院長の調査も同時に行ったが同調査でも侯副市長が游元院長を15%リードする結果となり、同市における国民党の優勢が明白となった。（表2）

右結果を受けて、同紙は、朱市長の再選は有力であるが、侯副市長が出馬しても国民党は勝利が見通せるころ、朱氏が市長再選を目指すか直接總統選挙に挑戦するかの選択の幅は広がったと分析した。

2010年の選挙で民進黨は当時主席の蔡英文が朱氏に挑み惜敗したが、今回の選挙では基層支持者から期待された蔡英文、蘇主席が出馬を見送っており、民進黨の同市における不戦敗の可能性を嘆く声も聞かれている。

### （3）台中市長選挙

2010年は台中市初の直轄市長選挙で、民進黨は蘇嘉全元内政部長が現職の胡志強市長に得票数で3万票まで迫る善戦をし、国民党に冷や汗をかかせたが、次期選挙でも接戦が予測される。

胡市長は民進黨権時代から国民党の将来を担うリーダーとして馬總統、朱新北市長とともに「馬

立強」と呼称されたよう、同氏の動向は注目を集めている。旧台中市と現直轄市を含めると3期連続で市長を務める胡氏は、春節前まで再出馬を明言せず、後継者には、現前職副市長、現職立法委員が出馬の意向を示していたが、いずれも支持率は低く、国民党中央は胡市長に対し再出馬を再三要請している等の報道が多数されてきたが、紆余曲折を経て春節明けの初出勤日となった2月5日に同氏は正式に出馬宣言を行なった。

一方、民進黨は現職立法委員の林佳龍と蔡其昌が激しい予備選を展開したが、その最中に実施された『聯合報』の調査では、支持率比較では林が蔡を大幅にリードし、右を踏まえて行った林 VS 胡の支持率調査では林が胡を6%リードした結果となった。なお、胡 VS 蔡の調査では胡が蔡を12%リードする結果となった。（表3）

その後、民進黨は党内予備選を行い、林が勝利し、公認候補に内定した。なお、林は2005年にも現職の胡市長に挑戦したが大敗しており、今回は再挑戦となるが、林委員は党内有力派閥新潮流派のホープである蔡委員と激しい予備選を展開したことから、民進黨が勝利するには、党内の団結が鍵になるとの指摘もされている。

### （4）台南市長選挙

12月26日に公表された台南市長選挙の支持率調査は、民進黨籍で現職の頼清徳市長が国民党の想定候補に対し60%以上の支持率を獲得し、圧倒

表3 2014 台中市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
胡志強 (国)	36	胡志強 (国)	45
林佳龍 (民)	42	蔡其昌 (民)	33
いずれも支持せず	7	いずれも支持せず	8
未決定	15	未決定	15

資料元：「2014 台中市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月25日）頁1

的なリードを保ち「敵がない」と揶揄される結果となった。同調査では、頼市長の支持は藍軍支持層にも広まっており、磐石の態勢に近い様相となっている。

台南市は1997年以降、民進党候補が連続当選しており、陳水扁前総統の出身地でもある旧台南県長に限れば、1993年から民進党候補が連勝しており、緑陣営が優勢な選挙区であり、頼市長の施政満足度も高く、死角はないように見える。一方、国民党陣営は有力な候補がおらず、「不戦敗」の様相が濃く、『聯合報』は吳清基元教育部長、謝龍介台南市議との対決を想定して調査したが、いずれも大差をつけられる結果となっており、候補者選びは難航している。

表4 2014 台南市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
頼清徳 (民)	62	頼清徳 (民)	64
吳清基 (民)	15	謝龍介 (国)	13
いずれも支持せず	4	いずれも支持せず	4
未決定	20	未決定	19

資料元：「2014 台南市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月26日）頁1

### （5）高雄市長選挙

12月27日に公表された高雄市長選挙の世論調査の結果は、現職の陳菊市長が現政務委員の楊秋興を大幅リードする結果となった。陳市長は、旧高雄市長、旧高雄縣市合併後の市長を各1期務めているが、同人の施政に対して、72%が満足と回答しており、国民党系支持者にも支持を広げており、圧倒的な優勢にあることが明らかになった。

国民党は、元高雄県長で2010年の選挙で陳市長に挑戦し惜敗し、民進党を離党し、政権交代後に国民党に入党した楊氏の推薦を決定したが、苦戦必至の情勢である。

表5 2014 高雄市長選挙支持度調査

候補者と支持率	
陳 菊 (民)	56
楊秋興 (国)	20
いずれも支持せず	4
未決定	20

資料元：「2014 高雄市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月27日）頁1

### （6）桃園市長選挙関連

現在の桃園県は、人口204万人（2013年12月統計）で台湾最大の人口を有する県であり、2014年12月に直轄市に昇格予定である。12月28日に公表された桃園市長選挙の支持率調査では、現職の吳志揚県長が民進党の想定候補2人、彭紹瑾元立法委員、鄭文燦元新聞局長に対して10%以上のリードを保つ結果となった。

桃園県は本省、外省、客家、原住民の台湾を代表する4族群が融合する地域であるが、選挙では、戒嚴令時代に許信良元民進党主席が1977年に無所属候補として国民党候補に勝利した以外は、呂元副総統が、現職県長の殺害により実施された1997年の補欠選挙を含め2度勝利しただけで国民党が圧倒的な強さを誇る地域である。民進党候補は、2月上旬段階で公認候補が確定していないものの苦戦は必至である。

表6 2014 桃園市長選挙支持度調査

候補者と支持率		候補者と支持率	
吳志揚 (国)	44	吳志揚 (国)	44
彭紹瑾 (民)	29	鄭文燦 (民)	27
いずれも支持せず	5	いずれも支持せず	6
未決定	22	未決定	23

資料元：「2014 桃園市長選挙支持度」『聯合報』（2013年12月28日）頁1

（前編終わり。次号に続く）



## 民間学生交流 ～日本台湾学生会議 in AKITA～

日本台湾学生会議は、日台の民間交流を双方の学生が引き継ぎ、次世代の交流へ発展させるために2005年に発足した団体です。台湾には台湾日本学生交流会がカウンターパートとして発足しており、双方が本会議開催の為、毎年日本と台湾の地を訪れ、テーマ毎のディスカッション・合宿、大学教授による講義等を通して、日台の社会現状を勉強しています。

ここでは、平成25年夏に、100名規模で秋田で行った本会議の様子を、4名の参加者より、報告させて戴きます。

### 日本台湾学生会議本開催を通して

東京本部 戸莉聡美

(東京外国語大学国際社会学部中国語専攻2年)

私は今年の春に日本台湾学生会議という団体に出会い、八月に行われた本開催に初めて参加した。人見知りで自分から他人に話しかけることが苦手な性格であるため、本開催初日は緊張で上手く分科会班のメンバーと話すことができず、落ち込んでしまった。しかし分科会班でのディスカッションやディベート準備、東北観光などの日程を通じて仲間と親睦を深め、約一週間という期間の中で、今までの自分では考えられないほどの多くの人と交流をし、仲を深めることができたと振り返っている。本開催での交流を通じて、大学生という共通項がありながらも異なる文化的背景を持つ人々との交流、そして学生間、更に言うと民間での交流の大切さを身にしみて感じる事ができた。先輩方の話から、参加する前にFacebook上で友達の数が一気に増えるとは聞いていたが、実際、本開催後にはFacebookのタイムラインは中国語だらけになり、嵐のように友達申請が行き交っていた。現代のSNSの普及の恩恵もあり、今も夏に出会った数々の友達との生きた交流が続けられている。

100人の日本人と台湾人と寝食を共にし、分科会での討論で互いの価値観の違いでぶつかったり、一つのテーマをともに考えたりした体験は、私にとってかけがえのない大切な思い出となった。勉強だけでなく秋田の文化をともに「体験」したこと、学生らしく皆で恋の話や将来の話をして盛り上がったことも印象深く記憶に残っている。

私の分科会班はメンバーが個性的であった。分科会中のディスカッションの発表会に際して、「日台の教育」というテーマに関する動画を睡眠時間を削ってまで作成したり、データ収集用にアンケートを作ったりするなどの、他の班とは少し変わった形式を用いて発表を行った。「日台の教育」という幅広いテーマの中で、いじめ問題や英語教育などを扱ったが、目に見える形で日台間での差異を意外なところで発見し、思わぬ収穫を得ることもあった。例えばいじめ問題に対して、「いじめ問題はなくなると思いませんか？」というアンケートの問いに対し、日本人は9割が「なくなる」と答えた一方で、台湾側は「なくなる」という回答が6～7割ほどであった。アンケートを行う際に、分科会班ではおそらく台湾における多様性が関係してくるのではないかと予測したが、学術的により突き進めたい結果が生まれたこともあった。

日台間の学生の意思疎通において、しばしば問題となってくるのは言語であったが、日本語が堪能な台湾人も多かった上に、こちらのたどたどしい中国語にじっくり耳を傾けてもらい、おかげで特に大きな齟齬もなく話し合いなどを進めることができた。英語という共通の言語はあったものの、本開催中には自身の語学力の乏しさに落胆することも少なくなかった。本開催での経験は、今年からの台湾留学に向けてより中国語を磨こうというモチベーションにも繋がったと実感している。

来年度に私は台湾に留学する予定であり、その留学中はカウンターパートである臺灣日本學生交流會の活動に参加するつもりでいる。より積極的に参加をして、留学先での授業で活発な意見交換ができるよう、今から日本台湾學生會議の活動に参加したり、本などで台湾やアジアについて、さらに中国語を勉強するのはもちろんのこと、日本についても学んでいきたい。

本開催への参加は、留学への思いをより強くさせたのと同時に、自身の将来を考えるきっかけともなった。日本と台湾の架け橋を担える仕事に就きたい、という気持ちがより現実味を持って込みあがってきている。今年の8月に台湾で行われる第九回本開催や自身の台湾留学を通して経験と知識

を増やし、今後の糧にしていきたいと思っている。

## 本開催を通して

東北支部 眞田剛志

2013年8月、日本の東北、秋田県では他の地域に比べ過ごしやすい天気が続いていた。そんな秋田の地にある国際教養大学で、第八回日本台湾學生會議の本開催が開催された。約一週間という短い日程ではあったが、そこでの新たな出会いや発見、共同生活というものは、私の今年の夏をかがえのないものへと変えてくれた。

本開催初日、今回が初参加で知り合いのいなかった私は、先輩方が久々の再会を喜ぶ中、とても肩身が狭かった。これから一週間をともにする仲間たちに声をかけようとしても、話題が思いつかず、ましてや中国語が話せない私にとって、台湾人学生に話しかけることなどできなかった。しかし、同世代であり、互いの国に興味を持つ学生間の集いでそのような心配は無用だった。私のルームメイトの台湾人学生は英語が堪能であったため、難なくコミュニケーションを交わすことができた。私にとって日台間の話を英語で交わすの



は新鮮であり、そこから台湾のスポーツ事情などを知ることができた。その他の台湾人学生とも、漢字を使っての筆談などを通してお互いの言語を学びあうなど、言語という壁は私が思っていたほど大きなものではなかった。また、日本人学生とも学年を問わず、共同生活を通して全国的に交友関係を広げることができた。こういった素晴らしい仲間たちがいなければ、今回の本開催はこれほど特別なものにはならなかっただろう。

本開催で特に印象深いのは、やはりメインの活動であった分科会だ。分科会を通して日台両国の学生は試行錯誤しながら意見を交え、お互いの国の価値観などを共有する。そして分科会班の努力の結晶として参加者全員に自分たちの意見を伝える。実際の発表会では、各分科会班により、日台間の文化的差異が日常の例と関連付けて報告された。大学に入学してから台湾を知るようになった私にとって、そこから得られる知識というのは驚きの連続であった。例えば、いじめ問題も日本と台湾ではその対象や原因が全く異なるなど、自分が普段では全く考えもしないテーマについての発表は大変興味深かった。また、今回の分科会はディベートが最終的な目標であったため、各分科会班の準備期間における努力を、ディベートへ臨む姿勢や発言からうかがうことができた振り返る。プレゼンテーションのような単なる発表ではなく、班内で協力をして時には臨機応変に意見を出すなど、団結力も必要であった。それがより一層班の結束を高めたのだと思う。私の分科会班は日台の観光がテーマで、世界遺産の観光地化を賛成する立場であった。ディベートに向けては経済効果に関してだけでなく、多角的な視点を持って意見を準備した。例えば、観光地化により人の手が増えられ整備されることで、遺産の保全に役立つといった意見を用意してディベートを臨んだが、データ不足が目立ち、相手の鋭い質問に答えることができなかった。結果は相手方の勝利であったが、このディベートを通して、今後ディス

カッションをするときにどのように進めればいいのか、どのように相手に反論すれば自分たちの意見をより優位にできるか、など多くのことを学ぶことができたと感じている。

また講演会では、国際教養大学の山崎教授から日台の高等教育について、問題や見解などの話をいただいた。分科会中にも教育問題を扱ったが、山崎教授の意見は説得力があり、私にとって新鮮に感じた。日本の大学では、専門的知識を学ぶことはあまり重要視されていない。実際、教授が教鞭を握っていらっしゃる国際教養大学は、リベラルアーツ教育が話題を呼んでいる学校である。しかし、台湾はそうではない。専門的な知識が重要視され、リベラルアーツのような教育指針はあまり受け入れられていないという。国際教養大学に通う私にとってこのことはとても興味深いものであった。文化の違いを矯正することは困難であるので、それを受け入れて、どのように違いを生かして行動するかが最も重要なのであろう。とても考え深い講演会であった。

分科会や講演会以外の活動も、非常に思い出深いものになった。文化ナイトでは両国の支部ごとにダンスや楽器演奏などの出し物をして、お互いの文化を紹介し合った。最も印象に残ったのは台南支部の蛍光棒舞であり、先端にライトのついたロープを音楽に合わせて振り回すというパフォーマンスであった。その名のごとく、暗闇で回転する光は蛍のようでとても幻想的であった。近代的に思えるパフォーマンスであったが、実は長い伝統があるものらしく、それも私の驚きをより強くした。他にも国際教養大学の竿燈会による演目など、普段はなかなか体験したり目したりすることができない発表が目白押しで、とても素晴らしい一夜であった。

約一週間という短い期間ではあったが、これほど充実した日々を、私はこれまでに送ったことが



なかった。この本開催で得た知識、考え、交友関係をこれからの人生で有意義に生かしていきたいと思う。

## 「国際交流の意義」

関西支部 原田沙美

今年で八回目になる日本台湾学生会議の本開催だが、今回は私にとって二回目の参加であった。今年の本開催は、昨年のものとは異なる点が大きく二つあった。ひとつめは日本の秋田での開催であったということ、ふたつめは自分自身が運営スタッフとしての参加であったということである。

この本開催に向けて半年前ほどに日本側のスタッフのみで合宿を行った。東京・東北・関西からスタッフが本開催について意見を出し合った。気づけば朝から日が暮れるまで話し合いをしたことを今でも覚えている。この合宿は東京・東北・関西の3つの支部がじっくり交流を深めることができる貴重な時間である。合宿最終日には朝まで日本台湾学生会議について熱く語り合ったりできるのも、この仲間だからこそだ。合宿を終えたあとも、引き続き支部でSkypなどを通して内容を深めていった。

そして迎えた本開催前日。私は関西支部スタッフの一員として秋田県にある国際教養大学に到着した。会場の場所を確認したり、荷物を運んだり、スタッフの仕事を確認したりと夜までミーティングは続いた。明日には日本側と台湾側の参加者たちに会えるという期待を抱いた反面、スケジュールは無事予定通りに進むのだろうか、企画した内容はうまくいくだろうか、といった様々な不安が頭をよぎった。そのような中、私たち関西支部ではうまく情報共有が出来ておらず、当日の企画に必要なものがそろっていないという問題が発生し

た。その時に助けてくれたのが、東京・東北支部のスタッフの仲間たちであった。皆各々の仕事で疲れ切っているはずなのに、夜遅くまで嫌な顔一つせずに仕事を手伝ってくれたのである。東京・東北・関西それぞれに住む私たちが、こうしてひとつの目標にむかって協力し合える絆を強く感じ、このような点が日本台湾学生会議の魅力のひとつであると改めて感じた。

これまでは運営スタッフとして本開催を振り返った。参加者の一員として本開催を思い返してみると、自分自身、最初から最後まで全力で楽しむことができたと感じている。その中でも一番思い出に残っているのは分科会である。例年の本開催では、分科会はディスカッションのテーマごとに班が分かれており、最終日にはグループでディスカッションした内容を、PPTにまとめて発表するという形式を取っていた。しかし今年から形式を変更して、班対抗のディベートを最終日に行うことになった。私の分科会班は日本人と台湾人各6名の計12人で、「日本と台湾の教育」についてのテーマを担当した。メンバーは日本人・台湾人ともに個性的な人たちばかりだった。一人一人が自分の考えや意見をしっかりと持っていて、性格もハキハキしている人もいれば、とてもおっとりとした人、それぞれの個性がとても強かったのである。テーマは「日本と台湾の教育」ではあっ



たが、いじめ問題から受験制度、英語教育にまで幅広くディスカッションを行った。最終日のディベートまでに、各分科会班の討論の結果を発表する場が三回あった。ほとんどの班ではパワーポイントを用いて発表を行っていたが、私たちの班ではパワーポイントを作って発表するだけだはおもしろくはないと考え、参加者たちにアンケートを取ったり、ビデオを撮影して内容を説明したりと毎回様々な工夫をした。そのため毎日夜遅くまで話し合いや資料作成に取り組んだが、どんなに眠い中でも笑いは絶えず、私にとって、とても充実した時間であった。

そして迎えたディベート当日。約一週間の短い期間ではあったが、私たちの班のチームワークは最高だったと振り返っている。お互いがお互いの性格を理解していたためか、周りを見ながら終始連携がとれており、素晴らしいディベートとなったのではと思っている。短い時間でもお互いの国の文化や特徴、自分の意見を交換し合うことで相手のことを十分に知ることができるのだ。昨年もそうであったが、やはり今年も本開催が終わると仲間との別れが惜しくなった。しかしこの本開催で出会った仲間とは、今でも頻繁に facebook や LINE などの SNS を通じて連絡を取っている。私が台湾に行った際は、必ず台湾日本学生交流会の仲間に会う機会を作り、また彼らが日本に来た際には、私たちが日本を案内して交流を深める。これからも私たちの友情はこのように一生続いていくだろう。

日本台湾学生会議に参加しなければ、このような国境を越えた最高の仲間たちに出会うことはなかったのだろうと思うと、この団体に巡り合えた私は本当にラッキーである。相手の国の文化や歴史を通してさらに自国に対しての理解を深めることができる。台湾が好き、日本が好き、この気持ちだけで出会うことができる仲間たち。目標に向かって熱く語り合える場所、それが国際交流のよ

き点ではないのだろうかと思ふ。今年行われる第九回本開催は台湾での開催である。新しいスタッフとともに次はどのような本開催になるのか、どんな人たちに出会うことができるのか、今から楽しみと期待を胸に抱き準備を進めていきたい。

## 日本台湾学生会議第8回本開催を通して

東京本部 青木駿

2005年に日本台湾学生会議（略称、日台）が設立されてまもなく9年になろうとしている。同時に、毎年夏に実施している日本人台湾人学生による交流合宿「本開催」も昨年で第8回を迎えることができた。私は第5回から参加しているため、日台創設以来ほぼ半分の歴史を直に肌で感じてきた。この歴史の流れの中で確信できることが一つある。それは、日台、更には日台関係が様々な紆余曲折を経ながらも確実に前進しているということだ。昨年の夏に、日本秋田県にある国際教養大学で開催した「第8回日本台湾学生会議本開催」においても、この前進がひしひしと感じられた。

今年の本開催プログラムの中で最も特徴的だったのが、メインイベントの分科会である。前年までは、1班およそ10名の日本人台湾人混合グループを10班作り、本開催期間を通じてある1つのテーマについてディスカッションを行い、それをパワーポイントにまとめ、最終日の発表会で共有するという流れであった。この形式の問題点として挙げられるのが、約1週間ある本開催期間中、一貫して同じテーマのディスカッションを行うために参加者が飽きてしまう点や、ディスカッションのプロセスよりも最終日に使用するパワーポイント作成に多くの時間を費やしてしまい、肝心の交流ができていない点であった。これらを改善す

るために、第8回本開催では、まずディスカッションテーマを「教育」「社会」「国際」「文化」の4つに分け、この中の一つから関連性のある3つのテーマについてディスカッションをし、一つのディスカッション終了後にそれぞれ内容共有を行うという形式に変更することに決めた。例えば、私が所属していた「教育」班は、教育に関係のある「いじめ」「英語教育」「受験」の3つのテーマについてディスカッションを行った。こうすることでより双方にディスカッションする時間が長くなり、自然と交流の質も向上した。更に、新たな試みとして、最終日に分科会班対抗のディベートを行うことにした。ディベートのテーマは各分科会班がディスカッションで取り扱ったテーマと関連性のあるものに設定をして、ディスカッションをしながらディベートの準備ができるだけでなく、まとまりのある、包括的な内容について学べるという画期的な形式に改善をした。具体的には「教育」班は「高校を義務教育化すべきである」というテーマについて肯定派、否定派に分かれ、ディベートを行った。肯定派からは、全体的な教育水準の上昇や効率的な小中高一貫カリキュラムの提案などがあつた。一方否定派は、義務教育化に伴う授業料無償化が原因の国家予算上昇や進学率を見る限り、既にほぼ義務教育化されていると言ってもよく、教育水準の大幅な上昇は見込めないなどの反論が出た。以上のように、第8回本開催における分科会は、例年に優る非常に有意義で素晴らしいものになったと振り返っている。

分科会などの学術面での交流プログラムの有意義な改善もさることながら、文化面の交流プログラムの企画にも工夫を凝らした。東京本部、東北支部、関西支部、台北本部、台南支部、スタッフ一同、そして全員が各々準備してきた出し物を発表し合う「文化ナイト」では、例年のような歌やダンスももちろんあつたが、東京からは三味線、東北からは竿灯など、日本人ですら普段は触れる機会の少ない伝統文化を体験することができ、台湾人のみならず、日本人からも非常に好評であつ

た。その他、関西からは御当地クイズ、台北からは演劇形式の台湾語講座など、とても充実したプログラムとなった。また、例年のように観光プログラムも実施したが、今年はより東北味わってもらうため、日程の異なる2つの観光プログラムを用意した。一回目の観光で行った秋田のなまはげ館では、なまはげが実際にどのように家庭へ訪問をし、どんな様子なのかということを劇形式で鑑賞した。初めてなまはげというものを聞いた台湾人も多く、係員の方の説明を熱心聴いていた。二回目の観光では、秋田の田沢湖や岩手の小岩井農場などを訪問し、時期が上手く重なつたこともあり、夕方からは花輪祭りにも参加することができた。実際にお囃子やお神輿なども見ることができ、どれも貴重な体験となった。

第8回日本台湾学生会議本開催は、以上のような様々な取り組みを通じて、例年に比べて最も質の高いものとすることができたと感じている。これも一緒に汗を流して頑張ってくれたスタッフがいたからこそ、実現できたものである。現在、私は後輩の指導やアドバイスをする役職についている。自分が日台で学んだこと、失敗した経験、全てをアウトプットし、後輩へと引き継いでいきたい。これからも日本台湾学生会議が日台の懸け橋として進歩していくことを応援するとともに、日台交流が更なる発展を続けていくことを切に願っている。





## 台湾応援ゆるキャラ「タイワンダー☆」だぁー

今回、台湾応援ゆるキャラ「タイワンダー☆」をご紹介します。

プロフィールは

生まれ：台湾で一番高い山、玉山のてつぺん

生年月日：2013年8月8日

性別：？

口癖：～ンダー、～わん

性格：食いしん坊、親切、人懐こい

趣味：バナナの食べ比べ、どこでも昼寝、日本ぶらり旅

特技：タピオカミルクティーの一気に飲み

夢：足つぼマッサージ全店制覇

チャームポイント：短い足（恒春半島）

仕事：今は日本で、日本と台湾との架け橋になるためのお仕事をしています。

「タイワンダー☆」は台湾の地図に緑の森をイメージし、頭には台湾の特産物であるバナナ、ヤシの木とランの花を飾り付けています。

「タイワンダー☆」がなぜ、日本で仕事をしているかって？、その答えを交流協会を訪問した「タイワンダー☆」に聞いてみました。

本当は「ゆるキャラグランプリ 2013」に出場しようと、日本にやってきたけど間に合わなかったンダー、どうしようと途方に暮れ、東京カイツリーを見上げていた時「台湾を応援する会」に拾われ、今は日本と台湾の架け橋になるお仕事をしているよ。

日本のみんなに台湾のことをもっともっと「見たい食べたい行き台湾♪」と思ってもらえるよう日々がんばっているンダー。

イベントにも参加して台湾をPRしているンダー。行くたびに「かわいい～」と言ってもらえ

てうれしいな。

これからもいろいろイベントなどにお邪魔して、台湾のことを一生懸命PRしていくのでよろしくね。

「台湾を応援する会」ではオフィシャルサイトにて、「タイワンダー☆」の活動など随時報告しています。4コマ漫画や1コマ漫画も掲載しています。またテーマソングも、同じくオフィシャルサイトからダウンロードできます。



踊るタイワンダー☆



後姿のタイワンダー☆

「タイワンダー☆」に関するお問い合わせは「台湾を応援する会」事務局まで。

住所：東京都中央区日本橋 2-2-3  
RISSHU ビル UCF402

TEL：03-6869-6952

FAX：03-3502-1412

e-mail：cheer4taiwan@gmail.com

HP：http://www.cheer4taiwan.org/

facebook：

https://www.facebook.com/cheer4taiwan

## 編集後記

二月といえばバレンタイン、日本ではチョコレート商戦で賑わうシーズンですね。日本や欧米文化の影響を強く受けている台湾でも、この日は情人節と呼び、好きな相手にチョコレートなどのプレゼントを贈ります。

ちなみにこの情人節、実は中華圏では年に2回、つまりもう一日あります。それは旧暦の七夕。むしろ中華圏の恋人達にとっては、こちらの方が2月14日より本番のようです。更にその七夕にまつわる物語は、実は日本人もよく知る織姫彦星の昔話と『天女の羽衣』が一緒になった内容だったりするのですが、それはさておき。

ところで、日本ではバレンタインには女性から男性へチョコを贈って好意を伝えるのが慣例ですが、台湾では、女性から男性へ告白することが一般的ではないと感じる人が意外にも多いようです。気持ちを伝えるのは基本男性からであり、女性からの告白は、ドラマ等で見知ってはいても、現実にはされると男性側は吃驚してしまい、下手をすると恐怖さえ感じるのだとか。これも文化の違いでしょうか。もちろん昨今は必ずしもそうとは限らないでしょうが、肉食系という言葉が聞かれて久しい大和撫子の皆様、くれぐれもご注意下さい。

(N・M)



## 交流 2014年2月 vol.875

平成26年2月25日 発行

編集・発行人 井上 孝

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号

青葉六本木ビル7階

公益財団法人 交流協会 総務部

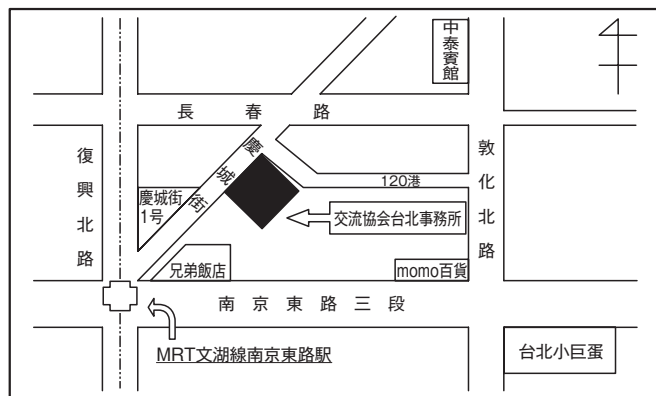
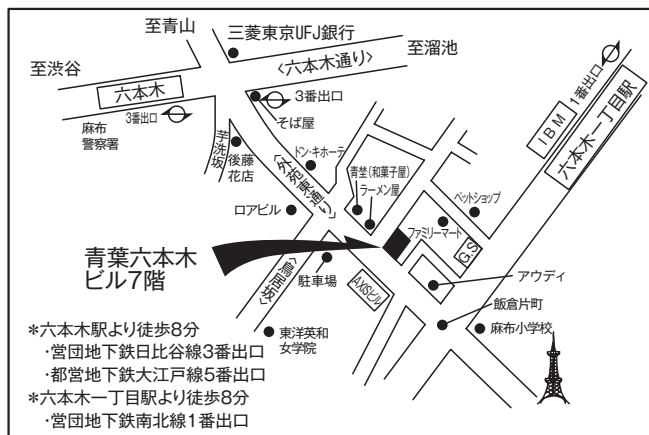
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 丸井工文社



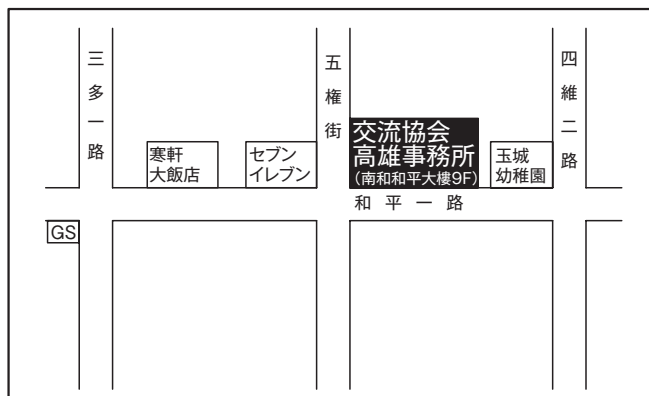
台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓

Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787

URL [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top)



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号

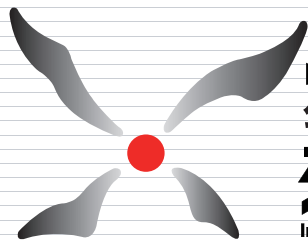
南和和平大樓9F

9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

URL [http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top)



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

**交流協会**

Interchange Association, Japan (IAJ)

